

皇太子 鵜 岡本宮に居住したまふ時に、縁有りて宮を出で、遊観せむとして幸行す。片岡村の路の側に乞囚人有り。病を得て臥す。太子見て輦より下りたまひ、俱に語りて問訊ひたまひ、著たまふ衣を脱ぎて病人を覆ひたまひ、而うして幸行したまふ。遊観既に訖り、輦を返して幸行したまへば、覆ひたまふ衣を脱ぎて木の枝に掛け、彼の乞囚無し。太子衣を取りて著たまふ。有る臣白して曰さく「賤しき人に触れて穢れたる衣、何すれぞ乏しくして更に著たまふ」とまうす。太子詔はく「佳きかな。汝は知らず」とのたまふ。後に乞囚人、他処にして死ぬ。太子聞きたまひて使を遣りて殯せしめたまふ。岡本村の法林寺の東北の角に有る守部山に、墓を作りて収め、名けて人木墓と曰ふ。後に使を遣りて看しめたまへば、墓の口開かずして、入りたる人無し。ただし歌のみを作りて書きて墓の戸に立つ。歌に言はく「いかるがのとみのをがはのたえばこそわがおほきみのみなわすられめ」といふ。使還りて状を白す。太子聞きたまひて嘿然して言はず。誠に知る、聖人は聖を知り凡夫は知らず、凡夫の肉眼には賤しき人を見、聖人の通眼には隠れたる身を見る、と。斯れ奇異しき事なり。

また謫法師の弟子円勢師は、百済国の師なり。日本国の大倭国葛木の高宮寺に住む。時に一の法師有りて北の坊に住む。名けて願覚と号ふ。其の師常に

明旦に出でて里に行き、夕に來りて坊に入りて居る。以ちて常の業とす。時に円勢師の弟子の優婆塞、見て師に白す。師答へて言はく「言ふことなかれ。默然せよ」といふ。優婆塞竊に坊の壁を穿ちて窺へば、其の室内に光を放ち照り炫く。優婆塞見て、また師に白す。師答へて言はく「然有るが故に我れ汝を言ふことなかれと諫めたり」といふ。然うして後に願覚忽然に命終る。時に円勢師、弟子の優婆塞に告げて言はく「葬り焼き収めよ」といふ。すなはち師の告を奉りて焼き収め訖りぬ。然うして後に其の優婆塞、近江に住む。時に江に有る人言はく「是に願覚師有り」といふ。すなはち優婆塞往きて見れば実に願覚師なり。優婆塞に逢ひて談りて言はく「比頃謁らずして、恋ひ思ふこと間無し。起居安くありやいなや」といふ。当に知るべし、是れ聖の反化なることを。五辛を食むことは、仏の法の中に制む。而れども聖人用食むときは罪を得る所無し。

三宝を信敬ひて現報を得る縁 第五

大花上位大部屋栖野古連公は、紀伊国名草郡の宇治の相伴連等の先祖

也」とする。三冠位十二階制をきだめたことをいう。底本訓釈「續音赤也」。二「内外」(上巻序)にわたってすぐれているがゆゑに聖徳と称した、という論理であらう。制作の功ゆゑとするのは福井康順説。元天皇よりも上位の待遇を得ている、という意味も含まれている。

一奈良県生駒郡斑鳩町あたりに所在。書記では、推古天皇十四年(西)にここで法華経が講ぜられていた。底本訓釈「鵜伊加留加」。二奈良県北葛城郡王寺町あたり。三乞者。乞食。底本訓釈「乞下音可太乃為、又云時反、二合、保可比、止」。四「乞下音古太反、又云討反、二合、保可比、止」。五底本訓釈「輦見己之」。六未詳。七棺を「ひとき」ということによる命名であらう。八巨勢三枝の作(上宮聖徳法王帝説)。本説話の一部分として解するならば、みはは上文に聖徳太子の「名」について述べられていることにかかわる。九「本書(とくに延暦六年原撰本)では、日本の仏教は聖と隱身の聖とによって伝えられてきた、とする考えが基調となつてゐる。本説話では聖徳太子が聖となされ、乞囚人が隱身の聖とされている。『いかるが』の歌を詠んだ乞囚人を文殊菩薩の化身とみる説が、喜撰式、俊頼體、奥義抄など、後代の書にみえる。とくに喜撰式には「隱人文殊」とある。文殊師利般涅槃經に「此文殊師利法王子、若有レ人念、若欲供養修福業者、即自化其身、作貧窮孤独苦惱眾生、至三行者前ことあるのにもとづいて、文殊師利菩薩が乞囚人や飢者に化して人々を導いた、という内

容の説話が後代には作られたが、本説話もその承譜に知られるであらう。魏志・杜襲伝に「襲曰、夫惟賢知賢、惟聖知聖、凡人安能知非凡人耶(次証補訂、嵯山遠公話に「凡夫肉眼、豈能知賢」とみえる。乞囚人と化して死を現じた聖のイメージは、下巻五縁の鹿と化して死を現じた妙見菩薩に結びついている。二底本訓釈「奇米川良之久、又云アヤ之久」。三靜謐。北周の宣政元年(西)に四十五歳で歿。続高僧伝二二三に伝がある。自ら命を絶した。自らの腸を引き出して松の枝にかけた、とある。前半の聖徳太子説話にみえる乞囚人が衣を木の枝にかけたことからの連想の糸がつながっている。四未詳。本説話以外に所伝をみない。五奈良県御所市大字西佐味に所在。高宮庵寺跡がその地とされる。六未詳。本説話以外に所伝をみない。七底本訓釈「穿惠利天、又云字可知天」。八底本訓釈「幾字加へ波」。九本書では、焼く、という命令の例は多いが、焼く、というのはここだけにみえる。火に焼かれることによつて尸解する説話、すなわち火解説話として本説話にみえる中前正説がある。一近江国志賀郡の教待和尚の百歳説の長命と魚食とが本朝神仙伝に伝えられている。願覚のばあいにも元来は魚食伝承が存したであろう。末尾に突如としてみえる「食五辛」の制戒の記事は、三國遺事・五に「居士に化した文殊菩薩が乾魚をもつてあらわれて懺悔をたしなめたことがみえ、本朝新修往生伝・三十九に文殊の化身たる老翁が鰻になつて登場したことがみえる。文殊の化身たる行基に膾を口に入れて吐いたところ魚となつたという説話が存することをも合わせ考えれば、文殊菩薩にかか

わる魚食伝承が存したことが推測される。本説
 話に願覺の魚食伝承が存したならば、そのイメ
 ージは、下巻六條の法花經と變じた魚の説話と
 結びつゝ、『三原文往而見』句説は中村宗
 彦説による。『三』は語助詞。動詞の後につき、
 意味はなり（敦煌文獻語彙詞典）。『三底本訓
 釈比類』二合、己乃己呂。『三底本訓釈
 』（謂か）津加夜乃（万か）津良敷之天）。『三願
 覺は聖が身を化した姿であつた、とする。隱身
 の聖として把持。』反は變（の省文）に由来す
 るか。梵經經古述記下本に「反身を心とみえ
 る。」「梵經經には「若仏子、不得食五辛、
 大蒜、葱菹、慈葱、蘭葱、興葉、是五種、一切
 食中不得食、若故食者、犯輕垢罪」とある
 底本訓釈云食罪、又云幾（こ）は五辛の中のど
 れかひとつの説明であらうが、不明である。

いひかる書物か不明。「本記」の引用とされる部分では、天皇名はすべて漢風體形で示されてゐる。八世紀後半では新しい形式である。書紀・欽明天皇十四年条には、「夏五月戊辰朔、河内國言、泉都茅渟海中、有梵音、震響若雷声、光彩見曜如日色、天皇心異之、遣薄辺直・此但日直、不書、天皇是傳異喪失矣。」
人海求訪、是時、薄辺直入人海、果見樟木

屋栖古連公そのために其の爲に出家せむと欲ふ。天皇聴ゆるしたまはず。四年甲申さむじにねんのあえさのとしの夏四月に、一の大僧有をりて斧とを執とりて父を毆うふ。連公見みて直に奏まうして白まうさく「僧尼ほんねを検たじ校かへて中正ちうせいを量はかるべし。僧尼ほんね惡あくを犯かせらば是非しよはいを斷ことわらしめよ」とまうす。天皇勅おほしことして曰のたまはく「諸しよなり」とのたまふ。連公勅うけたまはを奉たてまつりて検かふ。三三僧は八百三十七人、尼は五百七十九人なり。觀勒くわんろく僧を以もつちて大僧正だいそうじやうとし、大信だいしん

三 桜井枬。三 書紀・敏達天皇十四年三月条。
三 底本訓釈。堀・采利。難波の堀江のイメ
ジは中巻七縁に結びついている。〔底本訓釈
「徴徴か〈破多牟天利天介〉は、〈徴破多利
天〉と、下文にみえる天介」に対する訓たとい
えは「加多牟介牟止」との混合であろう。五書
紀・欽明天皇十三年条に「蕃神」、用明天皇二年
条に他神は「國神」に対するとみえる。六漂
着した神は西から東へと流れていて、西にある
ものとの地に返せ、という主張。豊國は旻詔に
は「蓋謂・韓國」也とある。書紀・用明天皇二年
条には「豊國法師」かみえる。七 底本訓釈「窺
字可く不」。八 底本訓釈「嫌會爾見」。九
書紀には「天皇信仏法・尊神道」とみえる。

三底本訓釈(止利比太支川)。三奈良県吉野郡大淀町大字比曾に所在。三推古天皇の即位は、書紀ではその前年の十二月八日。三五九三年四月十日。書紀には屋栖古のこと

はみえない。本説話の書き方で、肺腑侍者はひとつの役職のようにならに読める。二六〇五年。底本に「二乙亥」とあるが、二年は甲寅である。乙丑をもとにして国会図書館本に拠つて「十三年」と改めた。しかし、十三年の五月は庚寅朔。五月が甲寅朔となるのは十四年。戊午の日は五月五日。推古天皇十四年五月五日には赦作鳥が大仁位を賜わっている書紀。三書紀・推古天皇十四年条では五月甲寅朔戊午、勅々赦作鳥(二)として詔が述べられ、その詔は「此皆汝之功也」と閉じられ、つづいて「即賜大仁位焉」因以給。近江国坂田郡水田二十町二萬」と述べられている。本説話と叙述形式が一致する。

二、推古天皇十一年(六三)に制定された冠位十二階制による位。第七位。大仁位は第三位。三六〇九年。三兵衛県攝保郡、龍野市、姫路市、相生市あたり。本書では「幡磨」という表記が用いられる。「幡磨」はハリマ、「播磨」はハマ、ハンマ、に対応する表記である、とする説(浜田敦がある。元「町」は、土地の面積の単位。高麗尺の六六平方を一步とし、二五〇歩を一段とし、十段を一町とするのが古制。今制では高麗尺の五五平方を一步とし、三六〇歩を一段とし、十段を一町とする。和訓は「歩」は「あし」、「段」は「きだ」、「町」は「ところ」)。三六二二年。天寿国編帳銘、法隆寺金堂釈迦像銘などは、聖德太子の薨去を推古天皇三十年(六三三)とする。推古天皇二十九年(六三二)とするのは聖德太子伝暦。三底本訓釈「葵音興反、花死か也」。三六二四年。書紀はこの記事を推古天皇三十二年として記述。しかし、書紀の推古天皇三十二年、三十三年の叙述にみる朔の干支は三十二年、三十三年のそれに一致する。書紀には何らかの錯誤が存す

るが、本説話の本記の内部では、三十二年として何の矛盾も存しない。三　なぐる。底本訓釈「殿下ノ加不」。底本訓釈「殿下ノ加不」。同意をあらわす。三　書紀には、「当是時、有寺四十六所、僧八百六十六人、尼五百六十九人、并千三百八十八人」とある。六百済の僧。推古天皇十年十月に来朝(書紀)。毛書紀では僧正。云々屋敷古が僧都に任ぜられたことは、本説話以外に所伝をみない。

一書紀にみえる。底本訓釈安草案か（音安反）。二書紀には、この時に阿曇連が法頭になぜられてゐる。書紀では僧正、僧都には僧が、法頭には俗人が任ぜられてゐる。三六二五年。四底本訓釈（韻藻）上音分、下音服、五乎礼利（二合、加乎礼利か）。五生前の忠をたたえて歌詠せしめた。葬送には歌舞がおこなわれたのであろう。底本訓釈詠之乃波之（半）。六底本訓釈（蘇左女）二雙伊支太利。七底本訓釈（寛爾之）。八阿弥陀經通寶號。上には、文殊菩薩は北方常喜世界の歡喜藏摩尼宝樹仏である。とみえる（松浦貞俊）。九一鵝香南州果物志云、鵝香草也。可食香。二（印

積〔炫加も、也久〕。三 底本訓釈〔爰〔己も、爾〕〕
 三僧。七衆のひとつ。出家の成年男子。天竺
 風の容姿であるところをうかがわねる。四 東宮
 に仕える従者の童。底本訓釈〔童和良波奈利〕。
 五 軍勢の比喩的表現。底本訓釈〔鉦止支〕。二 鋒
 〔左支〕。↓ 中巻四十縁。六 底本訓釈〔鑑太
 万支〕。七 底本訓釈〔吞乃見〕。八 〔南
 无〕は、帰依する。九 〔无〕は、広韻に上平十一・模
 〔莫胡切〕に二无 南无。出釈典、又音無〕とあ
 り、〔も〕。妙徳菩薩は文殊菩薩。文殊菩薩に

むと疑ふ。すなはち誓願を發し、像を造りて恭敬はむとす。遂に大唐に至りて、すなはち其の像を造りて日夜帰敬ふ。号けて河辺法師と曰ふ。法師の性忍辱人に過ぎ、唐皇に重せらる。日本国の使に従ひて、養老二年に本朝に帰向る。興福寺に住み、其の像を供養して卒ぬるに至るまで息まず。誠に知る、観音の威力の思議すること難きことを。讚に曰はく「老師遠く學びて、難に遭ひて歸らむとす。濟渡るに由無く、聖を憶ひて椅に坐る。心に威力に憑りて、化翁來り資く。別れて後に遙に翳れ、儀を圖して常に礼みて、其の役輟まず」といふ。

第七 龜の命を贖ひ生を放ちて現報を得龜に助けらるる縁

禪師弘濟は、百済国の人なり。百済の乱の時に當りて、備後国三谷郡の大領の先祖、百済を救はむが為に軍旅に遣さるる時に、誓願を發して言さく「もし平に還來らば、諸の神祇の為に伽藍を造立て多諸くの寺を起らむ」とまうす。遂に災難を免れ、すなはち禪師を請へて相共に還來り三谷寺を造る。其

の禪師の伽藍と諸の寺とを造立てたる所以なり。道俗觀て、共に為に欽敬ふ。禪師尊き像を造らむが為に、京に上り財を売る。既に金と丹との等き物を買得て、難破の津に還到る。時に海の辺の人なる龜四口を売る。禪師人に勸へて買ひて放たしむ。すなはち人の舟を借り、童子二人を將て共に乗りて海を渡る。日晩れ夜深けて舟人欲を起し、備前の骨嶋の辺に行到りて、童子等を取りて海の中に擲入る。然うして後に禪師に告げて云はく「速に海に入るべし」といふ。師教化ふといへども賊なほ許さず。茲に願を發して海の中に入る。水腰に及ぶ時に石を以ちて脚に當つ。其の暁に見れば、龜負へり。其の備中の浦にして、海の辺に其の龜三領きて去る。是れ放てる龜の恩を報ゆるかと疑ふ。時に賊等六人、其の寺に金と丹とを売る。檀越まづ量るに価を過ゆ。禪師後に出でて見れば、賊等忙然しくして退進を知らず。禪師憐愍びて刑罰を加へず。仏を造り塔を蔽り、供養し已りぬ。後に海の辺に住みて往き來る人を化ふ。春秋八十有余のとしに卒ぬ。畜生すなほ恩を忘れず、返りて恩を報ゆ。何にいはむや、人にして恩を忘れむや。

帰依いたします。一底本訓釈「龍(万可利)」。三みずからの作つた罪過を懺悔すること。本説話は日本の文殊傳説の起源説話といふべきか。三見ると同時に、の意。蘇生のイメーは中巻七縁に結びついている。三六〇年。三讚嘆の短文。四字句が主。三特にそのみに心を寄せる。底本訓釈「儼(加多波比)」。三底本訓釈「存(持也)」。三底本訓釈「天(奈加奈波爾奈利奴留已止)」。三底本訓釈「説(誠也、並知也)」。三皇極天皇二年(六三三)に山背大兄王を襲つたことをいう。「八日(二八)年」は「十八日(二八)年」の誤り、とするのは攷証。「乱」のイメーは下巻七縁の仲磨の乱に結びつく。三中国山西省に所在。文殊菩薩の居処。三聖武天皇。この尊号は本書特有のもの。続日本紀・天平宝字二年(七五〇)八月九日条には「勝宝感神聖武皇帝。本書の尊号は光明子の尊号「天平心眞仁正皇太后」との混同、とするのは攷証の説。三聖德太子が聖武天皇に転生し、文殊菩薩が行基に化した、とする。上巻四縁と合わせ読むならば、聖武天皇を聖とし行基を隱身の聖としていることがわかる。

第六縁 善業についての現報説話。今昔物語集・十六ノ一、扶桑略記・養老二年七条に書本。

三底本訓釈「憑(依也)」。三高齡なるがゆえの称であるが、年齢に關しては疑點が多い。三続日本紀・養老五年六月二十三日の詔に「沙門行善、負(發)遊學、既經(七)代、難行、解(三)五術、方(婦)本郷、矜(貧)良深、如有修行天下諸寺、恭敬供養、一同(僧)綱之例」とみえる。三高句麗系の氏族であろう。攷証は堅部(三)氏とする。三推古天皇は五九

二年に即位、六二八年に薨去。下文に養老二年に帰国、とみえるが、推古天皇の末年より數えて養老元年は九十年にあたる。続日本紀に「負(發)遊學、既經(七)代」とあるのより推せば、齊明天皇の代(六五八)に高麗に渡つたことになる。推古天皇の代とすれば九十年の遊學となりあまりに高齡にすぎないが、本説話の内部に矛盾を生じるわけではない。三高句麗。三六六八年。元原文「急其河辺、椅壞無船」。三「其」は通説にしたがうて「そ」と訓んだが、この「其」は「於」の意で用いられているような印象を与えている。別の訓みが考えられてもよい。三「老翁」のイメーは中巻八縁の「不知老人」に結びついている。観音を念じたところ船が現われて救われた、という説話には、繫觀世音庇験記の竺法純の説話がある。三老翁と舟がたちまちに消えたというイメーは下巻八縁の「既而其像、奄然不現」に結びついている。

一耐え忍ぶこと。六波羅蜜のひとつ。二七一八年。三扶桑略記・養老二年条には「安置其像於興福寺、夙夜供敬、然間其像俄失、不知其所在」とある。三帰、椅、資、に押韻をこころみている。三底本訓釈「資(助也)」。三底本訓釈「憑(忽也)」。三底本訓釈「賢可久礼奴」。「底本訓釈(輟止也)」。

第七縁 善業についての現報説話。今昔物語集・十九ノ三十に書本。

三買ひ取る。底本訓釈「贖(阿可比天)」。三未詳。本説話以外に所伝をみない。二六六〇年、百濟滅亡。三広島県三次市、双三郡あたり。三郡の長官。「掌(撫)養所部(檢)察郡事」と(職員令)。二六六一年、出兵。六六三年、白村